

	2005年9月15日 第50号
発行：いたばし水と緑の会 事務局	
年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会	
<a href="http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/">http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/</a>	
E-mail : <a href="mailto:mizumidori@nifty.com">mizumidori@nifty.com</a>	
〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124	

## カラスウリ

垣根や藪に覆い被さって葉を茂らせているカラスウリは、西瓜のような可愛い実や真赤に熟した実は注意をひきますが、花についてはあまり知られていないようです。この花が夜に咲くためでしょう。

カラスウリについては、明治の物理学者寺田寅彦先生の「からすうりの花と蛾」というすばらしい随筆もあります。

雄株と雌株が別の多年草で、雄花は房になって数個、花の下に小さな実のある雌花は一個、いずれも葉の付け根につきます。夏の夕方、薄暗くなった7時ごろ、棍棒のような蕾の頭が割れ始め、白い糸が噴出してきます。少し縮まっていた綿のような糸も8時頃にはすっかり伸びて満開です。妖しいまでに美しいレース飾りになります。寺田先生の文では、「開ききってしまうころになると、どこからともなく、ほとんどいっせいにたくさんの蛾が飛んできてこの



花をせせって歩く。」と書いてありますが、なかなか虫は訪れませんでした。やはり東京は虫が少ないのでしょうか。

花は、先が5つに裂け、その縁から更に細い糸状の裂片が広がります。暗がりの中で、花弁を大きく見せ、蜜のある場所を知らせる蜜標の役目も果たしているのでしょうか。蜜は6cmほどのがく筒の底にあります。雄花では花粉の入っている葯がS字に折れ曲がってがく筒の入口を塞いでいます。花びらに止まらず奥の蜜を吸える虫は、長いストローを持ち、ホバリングができる夜行性のスズメガの仲間となります。蜜を吸いにくくしていた変わった形の葯は、頭を突っ込んで来る蛾に確実に花粉を着けるためなのでしょう。

夜も10時ごろになると、盛りも過ぎ、縮みはじめます。夜明けには、濡れたティッシュペーパーの塊のようになって、見る影もありません。

それにつけても、あの繊細な花弁を蕾の中に畳み込み、絡み合うことなく広げていく巧みさに驚くばかりです。

いたる所に芽を出し茂っているカラスウリには、その増やし方に特別な方法を持っています。この多年草の植物は根に芋を持ち、毎年ここから芽を出し蔓を伸ばします。また、あの赤い実の中にも沢山の種が入っていて、鳥などに運ばれ、あちこちで発芽します。そして、もう一つの驚くような方法があります。8月ごろ、蔓の先が真っ直ぐ下に垂れ下がってきて土に潜り込み、芋を作るのです。次の年、そこから芽を出し新しい固体が出来るのです。クローンを後世に残す確実な方法ですね。



蔓が土に潜り込みできた芋

ところで、カラスウリの名前の由来は2つあります。一つは、いつまでも冬枯れの枝に残る赤い実をカラスの食べ残しと見立てたもの、もう一つは、美しい赤い実の色が唐から輸入した朱墨の原料となる辰砂(しんしゃ)に似るからとのことです。

現在は、赤い実を飾るくらいしか利用の機会はありませんが、かつては食べたり、薬にしたり、遊びに使ったりしました。青い実の中をくり抜いてお化け提灯にして子供の遊びに、カマキリの頭のような種を大黒天の顔に見立てたり結び文に見立てて財布に入れて招福を願ったりもしました。そのためカラスウリのことを玉章(たまずさ)とも呼んでいました。葉や芽は山菜として、若い実や漬物に、根から採った澱粉は団子にして食べたそうです。また、根から採った澱粉は天瓜粉の代用(本物はキカラスウリの澱粉)として汗知らずに、実や葉の汁、実の綿などはしもやけやあかぎれの薬として利用されま

した。ウリネ・ツチウリ・ヤマウリ・キツネノマクラ・ヒサゴウリ・クソウリ・ゴウリなど各地に多くの方言名があります。もう一度、じっくり眺め直してみたい植物ですね(篠原智男)。

## 昆虫の集まる花木は危険か

最近公園や庭などにアベリアをよく見かけますね。アベリアという名前になじみがなくても、6月頃から10月頃まで白い小花をたくさんつける植え込みの木と言えば「ああ、あれか」とわかるおなじみの花です。花はほのかによい匂いがします。花が次々と咲き続けるので、いろいろな昆虫が蜜を吸いにきます。

このアベリアに、スズメバチが来るから切ってほしいという苦情がみどりと公園課にあったそうです。そのアベリアが通学路にあたる公園の植え込みになっており、子供が刺される危険があるということです。

この話はいろいろなことを考えさせられます。

一つは、スズメバチには強い毒があるから、スズメバチが花の蜜を吸いに来ているら、万一のことを考えると切らなければならないのかということ。

もう一つは、都会にすめなくなった生き物は数多くあるが、公園等の緑化によって都会にすむ生き物も少なくない。「身近に自然を」を言うときイメージするのは、チョウ、トンボ、カブトムシ等で、その他大勢の虫のことは無関心です。無関心を通り越して刺さなくても害虫扱いし、刺す虫、毒のある虫は絶対許さない、虫に対する包容力が小さい都会人が増えたら困るなあと感じます。

私が以前住んでいた新宿区では平成7年度から「生き物と共生し ふれあえるまちづくり」を進めています。だいが前の話ですが、新宿区の広報で庭に生き物を呼ぼうという記事を見て、私は低木のアベリア、ユズ、ブッドレアが植わったチョウを呼ぶ花木のプランターを申し込みました。参加者はプランターに来る生き物を観察し毎月結果を報告するのです。

目白駅近くの都心の集合住宅、しかもベランダには屋根があるので、昆虫が来るのか、報告できるような結果が得られるのか心配でした。

高さ30cmほどのユズにアゲハチョウが卵を産み、鳥の糞のような幼虫がかえり、何度か脱皮して青虫になりました。アゲハチョウは次々と来ては、卵を産みましたが、いつも青虫になったとたん鳥(たぶんスズメ)のご馳走に。生き物の世界は厳しい。アベリアの花にはシジミチョウ、セセリチョウ、ハナアブ、クマバチ、ミツバチ、オ

オオスカシバ、ホシホウジャク、その他図鑑で見てもわからないもの等々。オオスカシバとホシホウジャクは花に止まらずに、空中で羽を激しく動かし、ホバリングしてストローのように口を花に差し込み蜜を吸います。器用で見ていて飽きません。夜来て蜜を吸う虫もいます。アベリアは花の咲く期間が長く、虫たちがよく集まるので、なぜアベリアが選ばれたか納得が이었습니다。驚いたことに、コカマキリの卵が産み付けられ、翌春、孵化し、吹けば飛ぶような小さな子供コカマキリが数匹出できました。

新宿区の集合住宅でも蜜源があれば虫がくること、虫たちも健気に生きていることを自分の目で確かめ、感激。散歩で生き物に出会うのが楽しみになりました。

ところでホバリングして蜜を吸うオオスカシバは大きいので「オオスズメバチだ」と思っている人も少なくないと思います。そう言う何人かに「これは蛾の仲間だ刺さないから大丈夫」と教えてあげたことがあるからです。子供のときアシナガバチの巣を突いて刺された経験がある人は多いはずですが、今やそのアシナガバチも駆除の対象に・・・

身近に自然を感じなくなると、身近な生き物との付き合いもわからなくなる、それが心配です。都会の自然が大切だと言うとき、あまり好きでない生き物の住む権利を認めることだと思うのですが・・・(坂本 郁子)



アベリアの花に来るクマバチ(左)とちょっとピンぼけのオオスカシバ(下)



## バッタ広場の大きくなった木を切って草原に後戻り

8月27日(土)猛暑の中、バッタ広場北側の木を切りました。木を切るのは2年ぶりとなる北側はエノキとクズのジャングル。クズやアズマネザサの勢力を弱めるには地上部に最も栄養分がある夏に切るのがよいとあり、真夏の作業となりました。暑

かった！ 作業は午前中で終わらず午後も続けてバテバテに。

5m四方の区間の樹木と生き物調査も実施しました。5m四方に、エノキ127本、アカメガシワ、クヌギおよびアズマネザサが密生し、木の太さは直径数mmから4cm弱まで、高さはほとんどが150cm以上あり、ツル植物ではクズ、ガガイモが繁茂していました。過去の調査記録を見ると、2002年には探して見つかる程度だったクズが、2004年秋から急に増え、今年は一層ボリュームアップする急成長ぶりです。幼虫は4月時に比べぐっと少ない。

切った木は、とりあえず広場の中に山積み(コオロギが喜びそう)。この木をバッタ広場の壊れた柵の補修に使ってはどうか、という提案が運営委員会であり、そういう形で資源の山を活用することになりました。ちょうどゴマダラチョウやコムスジ等の産卵時期なので、樹木とクズは全部切らずに残し(疲れてやり残したのではない)、冬に残りの木を1mの高さに切ることになりました。そして、今やお日様を独り占めしているアズマネザサも早い時期に切らなければなりません。

瀬田さん曰く、「何もしないで5年程たつと森になることがわかった、将来人口が減って土地が余ったら、コンクリートを壊して裸地にしたら森に戻せるね。隣接して自然の森が残っていれば、言うことなしですね。



## バッタ広場に来た蝶と蛾

### ギンツバメガ

羽を開くと3cmぐらいのやや小型の蛾、白地に薄茶色の筋が入った特徴のはっきりした蛾である。似た種類はいないので一度覚えれば同定は楽である。東京区部では珍しいようで、皇居や白金の自然教育園では記録されていない(区部の記録がひとつあるが原文献を見ていないので記録地はわからない)。

板橋区で最初に見つかったのは赤塚のバッタ広場、一昨年坂本さんが今回掲載したピンボケの写真を撮った時である。去年は確認できなかったが、今年の7月にようやく2匹採集することが出来た。その後数匹見ているので、ここで発生していることは間違いのないであろう。

食草はガガイモと他数種のガガイモ科植物が記録されている。バッタ広場では未だ

幼虫を見つけていないが、ガガイモを食べていることはほぼ確実である。付近にはガガイモが所々見られるが、多いのは荒川河川敷の笹目橋付近である。

バッタ広場のガガイモは多分近くから飛んできた種から増えたものであるが、蛾は荒川河川敷から飛来したというのが私の推測である。上流の秋ヶ瀬公園ではギンツバメは確実に生息し、笹目橋では蛾は未確認だがガガイモは多く安定した植生になっているからである。



ガガイモは大きくなると直ぐ刈られてしまう事が多く、この蛾も一時的には発生出来ても安定した生息は難しいのではなからうか。ガガイモをうまく管理し、バッタ広場を本種の永続的な生息地としたいものである。

### ヒメウラナミジャノメチョウ

ヒメウラナミジャノメは1960年頃までは栄町の自宅でも普通にいた蝶である。板橋区では空き地や手入れの悪い庭ならどこにでもいた蝶だったのである。現在板橋区内での確実な生息地は、私の知る限りでは和光市の芝宮橋下流の新河岸川兩岸のみだが、成増4丁目でも最近まで見られたという話も聞いている。都心部の皇居では今でも普通に見られ、千鳥ヶ淵公園付近のお濠でも見られる。

去年バッタ広場で1匹採集、今年も1匹目撃している。本種はいる所なら大抵群生し生息確認もしやすい蝶である。この2例はよそから迷い込んできたものである可能性が高い。飛び方は弱々しいが、どうも移動性は強い蝶のようだ。生息環境はやや背が高いイネ科の草が生えた草原で、木立がポツポツと生えている事が欠かせない。木立は人為的なものでも構わないが、根元までイネ科の草が生えているような所が好みで、東京付近の平野部に限ればでは草原性ではなく林縁部の蝶である。

ある生息地の動物の個体数はそこで生まれた数によそから移動してきた数を足したものであり、そこで死亡した数とよそに移動してしまった数の合計を差し引いた数が増加数である。移出率は種によりほぼ一定で、生息地の面積とは関係がうすいのである。ところが移入率は生息地の面積が小さくなり分断孤立化が進めば急激に減少し、確率はほぼゼロになる。的が小さくなる程ねらいを定めない矢が当たる確率は低くなるはずである。飛翔力が弱く偶然まかせで生息適地にたどりつく動物は移動性が強い

ほど絶滅確率が高くなる。市街地での本種の減少の一因はこれではないかというのが私の思いつきである。ただし本種の移動性について私は何のデータも持っていない。仮説と思いつきの差は実証的データが有るか無いかによるのである。

本種の食草はチヂミザサ、ススキ、チガヤなど各種イネ科草本、赤塚バッタ広場は生息の条件は満たしていると思える。広さはどうであろうか。ヒメウラナミジャノメが再び赤塚の地に住み着くことを期待したい。(釣巻岳人)

## スーパー銭湯の地下水くみ上げに対して板橋区議会に陳情書を提出しました

前野町のスーパーイズミヤ向かいの工場跡地にスーパー銭湯の建設が着々と進んでいます。このスーパー銭湯は1日に50トンの温泉と288トンの地下水を汲み上げて営業すると聞きました。条例では1日10トンが上限ですが、工場で使っていた井戸の既得権だというのが事業主の言い分だとか。昭和40年代に地下水の汲み上げにより1.2mものひどい地盤沈下に見舞われた板橋区。地下水の過剰汲み上げにより再び地盤沈下したり、見次公園の湧水が枯れたりという心配もありうる重要な環境問題です。私達にはなじみのうすいテーマですが、「タダの地下水を使えばコストが安くなる」という発想が通用する時代ではない、環境に配慮した営業をしてもらいたいと、急遽エコポリスセンター周辺の環境保護団体が集まって陳情書を出すことになりました。陳情内容は、**スーパー銭湯事業者に対して地下水の汲み上げを1日30トン程度に制限するよう強く指導してください 崖線の保全、雨水浸透等による地下水の積極的涵養、地下水の汲み上げ制限等を盛り込んだ「板橋区湧水・地下水保全条例」を制定してください**、というものです。いたばし水と緑の会、ぽんぷ、一步の会、志村城山みどりの会有志等の協力により、9月12日、97名の署名と共に区議会事務局に陳情書を提出しました。陳情の審議は9月30日になるらしい。署名は審議の前日まで追加提出が可能です。関心のある方は田中正安さん迄(3956-7997)。  
**紹介** 続 聞き書き 壘山の墓らしー土浦市穴塚

穴塚大池は霞ヶ浦の近くの農業用ため池で、里山風景が最近注目されており、動植物の調査も盛んに行われている。本書はこの地のかつての農作業や雑木林、ため池の利用などについての聞き書きである。「ドジョウぶち」といって、夜のたんぼでドジョウを釘を何本か植えたようなヤスで刺して採ったそうである。同じ採り方を板橋では「ブツ刺し」と呼んでいたことを蓮根の内田氏が書き残している。発行は穴塚の自然と歴史の会、定価は1950円、編者の阿部さんは板橋区内で中学校教員の経験をお持ちの方である。ご希望の方は釣巻へ。

# 活動のお知らせ

**運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。**

10月運営委員会： 10月7日(金) 18:30~20:30

11月運営委員会： 11月4日(金) 18:30~20:30

**いずれもエコポリスセンター環境学習室です。**

**会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく**

日時：11月15日(火) 18:00~ 場所：エコポリスセンター

**変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。**

**活動の問い合わせは瀬田まで(3969-7124)**

毎月第4土曜日が定例の活動日です。この日は、赤塚や徳丸が原公園で私たちが作った自然の場所を中心に自然観察やゴミ拾い、課題があった場所について別途必要な修理等を行っています。原則として雨天も実施します。

## 9月の活動 バッタ広場の昆虫さがし・鳴く虫・灯りにくる虫・蜜にくる虫等々

8月のバッタ広場の調査と作業でウマオイが何匹もいました。明るいうちは目で昆虫を探し、暮れてきたらスーチョン等の声を聞きます。釣巻さんが灯りと糖蜜にくる虫の調査をするので、泡の出る飲み物少々でのどを潤し夜の虫の観察します。その前に欲張ってバッタ広場のササ刈りもしたい。時間のある方は2時にカマをもってバッタ広場にお集まりください。

日時：9月24日(土) 15:00~18:00 集合場所：美術館前トンボ池

持ち物：懐中電灯、参加費：300円(飲み物代)

その他：雨の場合は、夜の調査は中止します。

## 10月の活動 城址観察会とゴミ拾い

秋の城址をぐるりと観察しながら、例によってゴミも拾います。

日時：10月22日(土) 10:00~12:00

集合場所：板橋美術館前のトンボ池

持ち物：水筒、観察にはルーペや図鑑、軍手、ゴミ袋

## 生き物のすめる環境整備の活動(平日の水曜日)

年月が経った池や草原ビオトープ維持作業を体力と天候と相談しながらやります。当面の課題は、浄蓮寺下のビオトープのザリガニ対策、バッタ広場のササ刈り、バッタ広場で切った木を使って壊れた柵の修理など。

日時：毎週水曜日 10:00~12:00 集合場所：美術館前トンボ池

その他：小雨のときは実施します。連絡先：坂本 3968-9760(090-4618-1295)